

審査の結果の要旨

論文題目 中国語の数量表現前置構文の描写・説明機能

論文提出者 雷 桂林

本論文は、中国語の数量表現前置構文の意味機能について考察を行うものである。中国語では、数量表現は通常動詞の後に現れ、動詞の前、即ち主語や連用修飾語として用いられる際には一定の制約を受ける。本論文は主として四つの数量表現前置構文を取り上げ、それぞれが受ける文法的制約を探り、さらに構文機能の観点からそのような制約が生まれる要因を考察した。

本論文は序章、第1部（第1章、第2章）、第2部（第3章～第6章）、終章から構成され、序章では考察対象とその問題点を提起すると同時に、本論文の構成、主張及び用例の出典などについて説明した。

第1章では、まず日中対照の観点から中国語の数量表現の指示・代用機能が弱いことを指摘し、指示・代用機能を果たすためには、修飾語句を加える方法や数量詞並列構文にする方法等があり、中でも数量詞並列構文において数量表現は対比性を有する分割式構文という形式をとることによって、文脈で言及した特定の要素を固定し、非同一指示の機能を果たすことを指摘した。第2章では、数量表現が非典型的な主語、若しくは述語内成分（連用修飾語）として機能する数量対応構文について考察し、従来数量対応構文における数量表現は主語と看做されてきたことを踏まえ、形式と意味の両面から検討を加え、これを連用修飾語と看做すことの妥当性を示し、問題の解決策を提示した。数量対応構文のもつこのような特徴は、第1章で述べた数量詞並列構文に見られる特徴とともに、数量表現が非典型的な主語・主題として機能することを示すものである。

本論文の中心となる第2部では数量表現の役割を構文機能の面から解釈することを試みた。第3章では、不定名詞が主語になりにくいにもかかわらず、不定名詞主語文が大量に存在しているという言語事実に注目し、構文機能の面から同構文の成立条件として、「場面内容の描写」を盛り込むことが必要であることを明らかにした。第4章では、時間量表現前置構文について機能の面から考察を行い、この構文の成立の要因として主語においては具体的な数量表現が加わることによって定の要素が増し、主語が現れるという側面を持つと同時に、述語においては時間量表現が示す期間全体に対する均質的で静的な叙述が要求されることを明らかにした。第5章では、“从～到～”（～から～まで）といったような、数量表現の枠を超えた、広義の線的概念を表す表現が文頭に現れる構文を考察し、これらの構文も描写的特徴を有することを指摘し、それは前述した時間量表現前置構文と同様、典型的には、文頭の線的概念が示す期間に対する静態的な描写が必要であることを指摘した。第6章では、第3章で述べた不定名詞主語文と第4～5章で述べた線的概念前置構文の特徴を整理した上で、“三個人”（三人）のような数量詞を主語としてとる数量表現は不定名詞主語文として機能する場合と、線的概念前置構文として機能する場合があり、前者の

構文は点的な（瞬間性を有する）特徴を有し、後者の構文は線的な（限界点を有し、一定の幅を持つ）特徴を有し、両者は異なる機能を有し、それぞれ人間の事態認知の相違を反映するものであることを示した。終章では、文の機能という観点から数量表現前置構文の全般的特徴を考察し、数量表現前置構文が事態発生の報告には不向きであり、いずれも描写・説明の機能を持つということを明らかにした。

本論文の最大の貢献は従来主語として成立しにくい原因として十分に満足いく説明が与えられていない不定の数量表現及び関連する数量表現前置構文について、コーパスから実例を採集し、詳細かつ妥当な分析を加え、それぞれの構文の機能を明らかにしたことにある。その意味で、本論文はいわゆる中国語の数量表現前置構文に関するこれまでの研究を大きく前進させたものと言える。しかし、論文に不備や問題がないわけではない。審査員から概念の規定にやや厳密さを欠く部分があり、また議論の過程においても論証が不十分な個所が見られるとの指摘があった。しかし、これらの問題は本論文の学術的価値を損ねるものではない。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。